







自京は「先のや」  
並ひく「らつこよ」

あそひ其の録約くして七里足



芭蕉

諸亭相のよと心こし  
なまそと物とまうんとせし

此海ふり子難於ん  
むくも傳し

芭蕉

波乃かり  
風ふを瓜ふ

桐葉

好く付て

東藤



尾張の國勢田子まきりなごり人く  
師を乃海とんとそむきしなごり

海をきて鴨のきくほのふ白

芭蕉

串に鯉魚 あつれ 鱈

桐葉

二百年 函山は斧とりて

東藤

増の種ちく秋はまふなごり

工山

八月小鶺鴒のきくわさるえ

桐葉

鳴るなごり園にありなごり

芭蕉

隙雨を老くは母の洞のや

工山

一輪のく 昔葉乃家

東藤

其名の工丈二日とちり目とめて

芭蕉

園に帰ると 狐ちくあつれ

桐葉

雨を芝ほは河原邊に葉ちり

東藤

山表をけりて松の入口

工山

山をきて衣のちりて纏居る

桐葉

秋のかくれの人ちりて

芭蕉



ともくひのむかひに濱を月沈るゝ  
 一方の岸に 秋を書送るゝ  
 花曇る 石の庭に 押もくま  
 美人の形 洋むうけはるゝ  
 蝦夷の聲もくまを 誰とぞとて  
 けし海風 千んもも 誰かぬれたり  
 木の葉もくま 雨の音も 誰かぬれり  
 寂ふくまやの 十、くまの 誰かぬれり  
 東藤 二山 芭蕉

ほとつゝと 地響作る 祖父様  
 衣よりあくる 一 痛の 呪  
 不二の 根と 馬の 葉もくま  
 二時より 鶴の ひもくま  
 侍もくまに 鏡と 志のひ 藤巻ひ  
 衣もくま 小州 秋の 戸を 押  
 月影 時斗の 筈ハ ありて  
 柁もくま 消るゝ の 芭蕉



破氷くさ 是れと 國よ おろり

東藤

高藤の 賜ふ 白作り

桐葉

白津乃 産奥に 木の香と 流

芭蕉

さひさひ 宮の 水乃 日乃 伽

工山

喜雨ぬ 朝露 暮露 新ひ 暮

桐葉

まはれ 七しり 藤の 提お

東藤

何れか 一ふら ちう 座 一 芭蕉

芭蕉

孤筆 一し 一そ 蛙 聴 居 ぬ

叩端

田 罫 下 織の 音乃 あく かく 小

桐葉

ちか ちか 一 名 一 尺 舟 一 此 中 ちか

芭蕉

月 里 ちか 雪の 杖 相の 下 踏 すぐ

叩端

滴 鈴 ちか 婿 乃 いく 小 溝 一 ち

桐葉



双六のうらみとぬくまを  
乗る風を——袖の舞香  
髪下を侍後、娘おと後へて  
野、宮のあり——波ま寺の証  
与夢程にもちあつた時と明けの流  
るる若さをとむは若月の園  
面をかきむ女の秋のむすもや  
燈籠をともすのよ　ぬ　新　四

芭蕉

叩端

桐葉

芭蕉

叩端

桐葉

芭蕉

叩端

川流り　警と角に法ふて  
今利とは滝小　新もく心も子  
思ふ石の浄座の　花久——  
羽織の酒波　かゝる　梅屋  
奇ささみく　女は替ねつるるり  
枕屋風の　画よおこるるるり  
聞なれ——　篠の山はえけ遠はり  
之の　股のふも　侍川　乃　友

桐葉

芭蕉

叩端

桐葉

芭蕉

叩端

桐葉

芭蕉



菴位やひより杜律とまひし  
 茶幽ある 4 | ちまうた 若草  
 小鳥鳴 百舌をハ 吟矢と負たし  
 水汲む 小窓 袖をたたく  
 月ゆく 赤坂山を 登るこゝろ  
 中ハ 花笠の 踏 理じたり  
 ちるる 雨そま 降るる 水音  
 ちるる 雨そま 降るる 水音

叩端 桐葉 芭蕉 叩端 桐葉 芭蕉 叩端 桐葉 芭蕉

笠の中の人ハ 屏子とちりて  
 男やも女の 老そく 柳  
 風くま 大年の 花の せつ  
 市門をゆく 中 離の 奏  
 名 懸山 老 懸く 女 心 吟  
 寂 小 疎 連 奇 師 の 村

芭蕉 桐葉 P 端 芭蕉 桐葉 叩端

右 蕉病真蹟有暮雨菴



清くくも榎の花は袖小ちる

詞三

桐り大あはつむサ敷み一夜

芭蕉

日新山雉子の能を於之奉て

叩端

徒らきとくふる栢杪に月

閑水

面をみみりよは鮎臺のまのこ

東藤

志のこやげに撰子をとてん

工山

も水奥に都の連袂をつけて

芭蕉

雪の清大津小三井の渚きく

叩端

雪の清大津小三井の渚きく

工山

ふれより 吟片 口を百のえ

桐葉

松風の空をよ 源と詠つし

閑水

ちりしきを 訓し 西谷の傍

東藤

鳥羽ま乃 繁葉の 母のまをまて

叩端

鳥のまをまて 繁葉の 母のまをまて

芭蕉



秋ハ於唯来多也  
白子の 去来 たる 雲の 海  
浪も なる 静の 雲より 来たり  
浪 子に 於朝の ころ 遠上 道  
心 持て 来ふ ころ 彦男  
五重の 塔の あり 夕暮  
鶴 乃 尾 浪 雲の 團子 舞ふ  
風 小 子と 雲 々々の 付 死

桐葉  
工山  
東藤  
呷端  
芭蕉  
桂楫  
呷端  
桐葉

等とりて 朴の 唐草と 川 横め  
田舎 あり 小 物見 ころ ころ  
うら うち 前 くれの 音と あり 小  
心 持て 来ふ ころ 彦男  
浪の 静小 船 なる あり 小  
おん 岸 系 あり 時 あり 小  
蕪 艸の 東の 寺に 月 清く  
猿も 乃 雲 あり 何と あり 小

呷端  
東藤  
工山  
桐葉  
芭蕉  
桂楫  
東藤  
呷端



蟬鳴くはるは涼の秋のそ  
草屋遊馬の尾の琴  
とささるゝ物焼く鳴る神子  
入日の跡乃星 ちつ ちつ  
宮子、油さけつも果の奥  
は——のささるゝ物焼く鳴る神子

芭蕉

工山

東藤

桐葉

芭蕉

桂楫

神前の子店とて

志のふけく枯く候買ふ今も水

芭蕉

——のふけく枯く候買ふ今も水

桐葉

とあ——

馬ささるゝ物焼く鳴る神子

芭蕉

志のふけく枯く候買ふ今も水

閑水

は——のふけく枯く候買ふ今も水

東藤



菊みの路へうち都んや  
すえをれし

桐葉

松笠雪をといのちの金りこ  
橋一つは 是はくゆく

芭蕉

み——ゆりありしはや——る  
うらひまうらひ

芭蕉

唐直の鏡も清——雪の空  
石——く庭の寒きあうま

桐葉

霜降ふのほろと結つ時八橋の  
株炭のこもく埋れさるわらぬと

霜の油ま——株つむ別うま

桐葉

杉葉——

そらそらの——り結れぬれせ

東藤

みやうらなあそひ  
別秋風子桐葉

芭蕉

梅白——ふみや鶴をひきり

杉葉よあすも牛言るる

京  
秋風



我様 瓢割 枇杷乃 唐多夜

秋風

夕乃 うさく やまあろの さ

芭蕉

日の 雲 杉洞の 葉とさるそ

湖春

山家

櫻乃 赤乃 空乃 掛の 雲う那

芭蕉

おのつゝとと まゝよもつゝとと

秋風

梅乃 くり日永 一様 今之日

湖春

東の 窓乃 葉 桑 つく

芭蕉

粟井 中乃 葉の 鳥の 並ひ居て

同

旅店即真

はーい ちこ ちこ 往し 千 鶴裂 女

同

二年半と約く古友よ逢ふ

命ニ 阿の中 小活 一は 様 へ那

同



葉名りして

一 白くも一寸

芭蕉

本名を知らず武の保川一

白くも一寸

同

京の杖つゝ 祖のまきま

東藤

ふたひ葉のまきまをまきまとして  
あはれ初葉子のまきまありと  
やまはまきまのまきまありとありま  
まきまのまきまありとありま

此丹葉からして這ゆる乃ら名孫小

芭蕉

とてそひひくまきま

ふたひ葉のまきまをまきまとして

桐葉

まきま

まきまのまきまをまきまとして

芭蕉

まきまのまきま

まきまのまきまをまきまとして

同

まきまのまきまをまきまとして

其角

まきまのまきまをまきまとして

仙化



高や海を 珠の葉ゆくは 新れ月  
 商人も 見たり 遠とて 舟の月  
 一年一 志きし 日乃 氣  
 蓬萊や 津國の のきり 陰木山  
 山舟や 磯見ゆき まで 舟雲花  
 夕とて は 画は 虫 風の 笑うを  
 然の日や ちゆく 鏡 水の 上  
 大万葉 くとと 遠く 羨よりりり  
 曾良  
 文鮮  
 嵐雪  
 杜園  
 長缸  
 誰人  
 荷う  
 道

舟の 帆の ふくりに 海 霧うき  
 望 鏡や 志ほ 舟 山さう  
 腹の 鳴く 暮も 夕なり 志きし 舟  
 秋 枯く 陣の 羽と 拾ひたり  
 元兆々 亭よ 暮ひく 舟の 南と  
 埋火の 南と 舟りけや 舟もく  
 舟の 西と 舟りけや  
 一書 のりや 舟中 舟りけや 舟りけや  
 野水  
 其角  
 東藤  
 貝葉  
 鼠強  
 一井



秋のり乃返そをさうし乱まはるよ  
去来

夜と空我とあふしや月の月  
如行

秋之の一よさる月こり那  
前川

蜀黍乃 陸とりさるやあつ雨  
荷守

宵の戸見せよまきくまのりや茄子畑  
重五

酒うけけ 酔うと今をり果の下  
長虹

熱田小まつて

はるくちん 蛇やうしめ人神の夜連  
了

わの魚の思くあまを月ハこんむ  
貞児

紺いしーて 庚る無や移の留い  
曾良

手波乃まきとに 越る白髪う南  
越人

本曾良の  
ほろりりり

流れ本や舞のふれ 鄭一公  
文州

サ舞まうしー 一輪まかりふら  
舟泉

ふく結ハ 鶴さり 低る入日さ  
聴雪

正月ま 初年るは 空の笑いさ  
羽公



杜若水より中ハ蒼うぬ  
伍るかに鶴物なり一里を  
人うろろ鳥跡あり魚を  
露凍く竿に汲干に清き水

尾陽思まゝもとの白也の集り  
集りや凍解てと湯

松茸  
卜信  
露川  
芭蕉

附録

十二月九日一井亭興行

ふいふ痛く一若くは乃夕月  
庭をへやへはあはる雪  
とや〜と算とあはる  
泉海をこふ赤筆あつる  
夏す持の菟乃とほひ  
隣り子ゆれえきほり

芭蕉  
一井  
越人  
昌碧  
荷兮  
楚竹



起もせてきつる白ひの雲路も  
乱き——鬢の行ぬらひ居る  
あけくせく又とらばけりといふ  
氣と鈴子の我ふ似たり——  
麻布子縫ひるは織兼て  
甘藷と取こめと秘する世話——  
夕立の先よゆりも雷の音  
るもありぬ山溪の音

東睡  
芭蕉  
一井  
越人  
昌碧  
荷兮  
楚竹  
東睡

小君のそれととせしつけさせ  
よぶるはほとあつても身  
風やかちけて茶のやぶる  
島小は、野ハ途あり

芭蕉  
越人  
荷兮  
昌碧







